

## シュンギク

シュンギクは、キク科シュンギク属に属する一年草または越年草である。地中海沿岸の原産で、原産地のヨーロッパでは観賞用とされているが、東アジアの日本、中国と韓国では野菜として食用に供される。シュンギクは茎葉に独特の香りと苦みを有し、ビタミンやカルシウムが豊富に含まれて、すき焼き、ふぐ鍋など鍋料理の具材に使われるほか、サラダと天麩羅にも好まれる。

シュンギクは葉が大きく厚く、香りが弱く、味に癖の少ない大葉種、香りと味の強い中葉種、葉が小さく葉の切れ込みが深く、香りが非常に強い小葉種の3タイプに分けられる。ただし、大葉種は味と香りが弱く、小葉種は収量が少ないため、栽培が少ない。現在本邦に栽培されているのはほとんど中葉種である。

農林水産省の2019年統計データでは、本邦のシュンギク栽培面積1830ヘクタール、収穫量2.69万トン、主な栽培地域は大阪、千葉、福岡、茨城、群馬、兵庫である。

### 一、シュンギクの栽培ステージ

シュンギクは生長が早く、病害虫も少なく、栽培しやすい野菜である。涼しい気候を好み、最適発芽温度15～20℃、15℃未満と25℃以上では発芽率が急に悪くなり、30℃を超えるとほとんど発芽しなくなる。生育適温は10～25℃、寒さに強く、5℃未満では生育が止まるが、0℃以下の低温に遭遇しても凍死しない。暑さに弱く、25℃を超えると、生育が悪くなり、品質も劣る。本邦では主に春播き栽培と秋播き栽培である。

春播きは4～5月播種、5～7月収穫する。秋播きは8月下旬～10月播種、10～翌3月収穫する。ハウス栽培では真夏を避ければ、年中栽培と収穫が可能である。

シュンギクの生育ステージは栄養成長期と生殖成長期に分けられる。栽培上の都合で、栄養成長期は発芽期、幼苗期、茎葉展開期、生殖成長期は抽苔・開花期と子実成熟期にさらに分けられる。ただし、抽苔・開花したシュンギクは茎葉に繊維が増え、硬くなり、商品価値が失うので、抽苔・開花期まで栽培する意味がない。図1はシュンギクの栽培ステージと各ステージに主に行う農作業を示す。

発芽期は播種から苗が初の本葉が出るまでの期間である。シュンギクは発芽率が低く、50%未満であるが、幼苗の生育が緩慢ではないため、通常圃場に直播きを行う。特にハウス栽培とトンネル栽培ではほとんど直播きである。一部の農家は発芽率を良くして、圃場の回転率を上げるために育苗箱またはセルトレイで播種、育苗してから圃場に定植する手法を採用する。

15～20℃では播種後3～5日発芽するが、それより低い温度ではさらに日数がかかる。地上に子葉が出るまでに苗の生長に必要な養分は種子の貯蔵養分に依頼して、外部から水分だけを吸収する従属栄養期である。子葉が出てからは根が土から養分を吸収し始め、種子が

らの従属栄養から独立栄養に移行する。

幼苗期は発芽後から 4~5 枚の本葉が出るまでの期間で、大体播種後 20 日までの期間である。直播きの場合は発芽後 1~2 枚の本葉が出た時点で 1 回目の間引き、4~5 枚の本葉が出たとき 2 回目の間引きを行う。セルトレイで播種・育苗する場合は、1~2 枚の本葉が出た時点で間引きをして、4~5 枚の本葉が出た時点で圃場に定植する。

茎葉展開期は株が続々と茎を伸ばして、新葉を展開する時期である。8~10 枚の本葉が展開して、草丈が 20~25cm に達した時点から収穫期に入る。

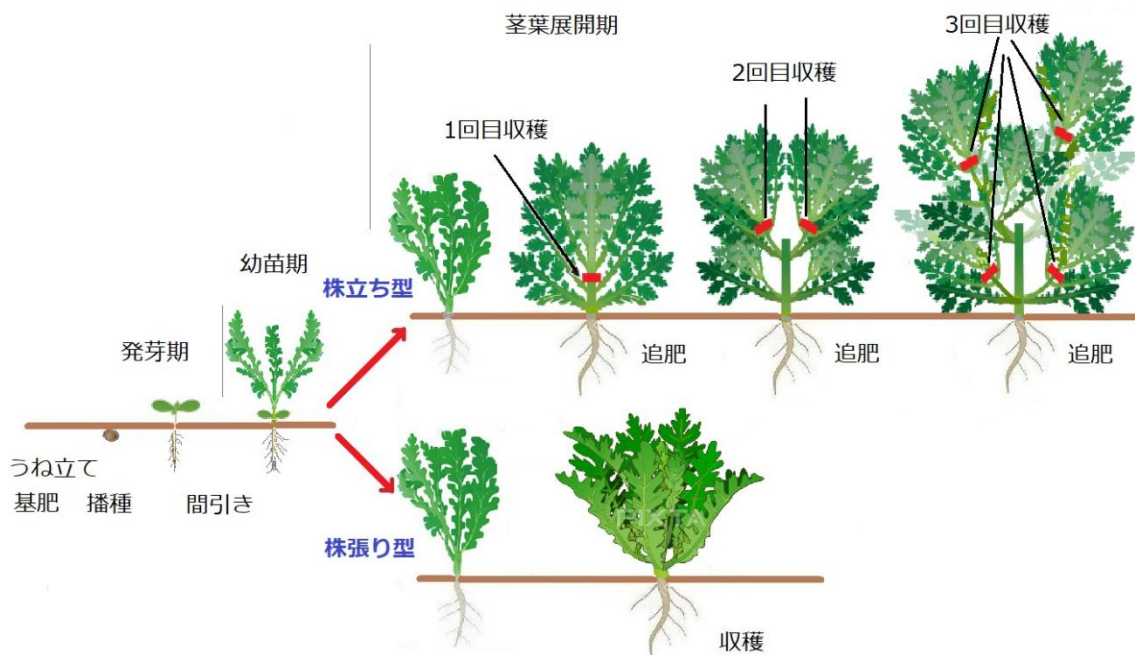


図 1. シュンギクの栽培ステージと主な農作業

シュンギクは株元から側枝がたくさん出る「株張り型」品種と、側枝が出にくく主茎だけが伸びる「株立ち型」品種があり、それぞれの収穫方法が異なる。

「株張り型」品種は株元から側枝が次々と伸びだし、主茎だけではなく、側枝にも葉が発生する。草丈 20cm ほどになったら、株ごと抜き取って収穫する。大体播種してから 35~40 日で収穫できる。

「株立ち型」品種は側枝がほとんど発生せず、伸びた主茎に葉が付いている。草丈 25cm ほどになったら下の葉 4 枚ほど残して、はさみで主茎を切って収穫する。主茎を摘み取ったことで、わき芽が次々として側枝として伸びるようになる。約 20 日後側枝が 20~25cm に伸びたら、葉を 2 枚残して 2 回目の摘み取り収穫を行なう。このように抽苔までに 3~4 回繰り返して成長した茎を摘み取る形で収穫する。

シュンギクは 12~14 時間以上の長日条件下で花芽分化が促進される。また、本葉 4 枚ほど展開した後に低温に遭遇すると、花芽分化も誘起される。その後の長日高温条件で抽苔・

開花する。早春播きでは苗期の低温と茎葉展開期の長日高温により、抽苔しやすくなる。秋播きでは茎葉展開期は短日低温の秋冬シーズンにあるので、翌春までに抽苔・開花せず、栽培上に有利である。本邦では秋播き栽培が主流である。

## 二、 シュンギク栽培の主な農作業

シュンギク栽培の農作業はその作業順で主に畑の耕起と整地、基肥施用、播種、間引き、病害虫と雑草防除、収穫である。図 2 は各地域の露地シュンギク栽培暦である。

栽培地域		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
寒冷地 冷涼地					播種		播種						
						収穫		収穫					
中間地	春播き			播種		収穫							
	秋播き	収穫							播種		収穫		
温暖地	春播き			播種		収穫							
	秋播き	収穫								播種		収穫	

図 2. 各地の露地シュンギク栽培暦

北海道や東北のような寒冷地域および海拔の高い高原冷涼地では夏が涼しいが、冬の厳しい寒さはシュンギクの生育に不適である。冬季の 11～3 月を除けば、他のシーズンではシュンギクを栽培することができる。大体雪解け後の 4 月中旬から 9 月上旬までに随時に播種が可能で、播種 35～40 日後の 5 月下旬～10 月中旬までに収穫することになる。

関東、東海の中間地域では、霜が降った後の冬季と梅雨明けした真夏の高温シーズンを避ければ、シュンギクは問題なく露地栽培ができる。通常、真夏の 8 月を境目に春播きと秋播きに分けられる。春播きでは 3 月中旬～5 月中旬まで播種して、4 月下旬～7 月上旬に収穫する。一番多く栽培されている秋播きでは 8 月下旬～10 月末までに播種して、10 月上旬から収穫が可能となる。また、シュンギクは 5℃未満では生育が止まるが、0℃以下の低温に遭遇しても凍死しないので、「株立ち型」品種は翌 3 月上旬まで収穫することができる。

九州、四国の温暖地域では、露地栽培は梅雨明けした真夏を避ける。通常、春播きでは 3 月上旬～5 月中旬まで播種して、4 月中旬～7 月上旬に収穫する。一番多く栽培されている秋播きでは 9 月上旬～10 月末までに播種して、10 月中旬から収穫が可能となり、「株立ち型」品種は翌 3 月上旬まで収穫することができる。

ハウスやトンネル栽培に於いて、真冬でも 10℃以上に保温できる場合は、30℃以上の夏高温シーズンを避ければ、季節に関係なく栽培できる。

概して、シュンギクの栽培が非常に容易で、栽培期間も短いので、露地栽培では年間 4～

6 作が可能である。ハウス栽培やトンネル栽培では真夏を避ければ、年間 6～8 作が可能である。

シュンギクは病害虫に対する抵抗性が強く、露地栽培では同じ圃場での連作が可能であるが、病害虫防除の観点から 2 連作までで、それ以上の連作を避けるべきである。連作の弊害を解消するために小松菜、ホウレンソウ、レタスなどほかの科の野菜との輪作が非常に有効である。また、ハウス栽培では、前作を収穫した後、ハウス内に土壌消毒を行えば、連作に問題がない。

以下はシュンギク栽培の具体的な農作業を説明する。

## 1. 耕起と整地

シュンギクは浅根性作物で、主根と側根は主に地面 10～15cm 以内の表層土に分布しているため、柔らかい通気性と保水性のよい土壌が適している。重粘土質土壌を除き、ほとんどの土壌に栽培が可能である。ただし、シュンギクは乾燥に弱く、水不足でその生育が抑えられる。良質のシュンギクを育てるために地下水位が 30cm 以下で、周辺の圃場（水田）や農業用水路からの浸入水がなく、排水が良く、保水性の良い壤土質または埴土質の圃場を選択したほうがよい。また、生育を良くして、管理と収穫の利便さ、降雨後の積水による湿害を防ぐために必ずうねを立てて栽培する。なお、シュンギクは病害虫に対する抵抗性が強いが、同じ圃場での多連作を避けるべきである。

耕起とは畑の土を耕し、栽培に適した大きさの土塊にして、耕作土層を形成する作業である。耕起は前作物の残渣を土の中にすき込んで腐熟を促進させることや土の中に空気を入れて乾燥を促進し、有機態養分を無機化させる等の役割もある。整地とは耕起された土塊をさらに細かく砕き、播種や移植に適する状態にする作業である。

整地した後、定植の前にクワやうね立て機を使って、うねを立てる。管理上の都合で、シュンギクの慣行栽培は 2 条植えと 4 条植えである。

摘み取り収穫の「株立ち型」品種は多回収穫を行うので、管理上の利便さを考えて、主に 2 条植えを採用する。2 条植えの場合はうね間 90～100cm（うね面約 50cm、通路幅 30～40cm）のうねにする。

一方、1 回収穫の「株張り型」品種は株ごと抜き取って収穫するので、4 条植えに適している。4 条植えはうね間 130～140cm（うね面 90cm、通路幅 30～40cm）のうねにする。

うね高が 10cm ほどでよいが、粘土質の圃場、水はけの悪い圃場ではうね高を 15～20cm にする必要がある。うね立ての模式図は図 3 に示す。

ハウス栽培では日常管理がほとんど不要であるので、土地を最大限に有効利用するためにうね立てをせず、ハウス中央に幅 30～40cm の作業通路を残すだけの平うね栽培が多い。

畑の耕起と整地作業に下記の注意事項がある。

- ① 土壌水分が多すぎると、耕起した土塊が大きく、整地の際に土を細かく砕きにくく、作業効率が悪くなるので、必ず畑が乾燥の状態で耕起作業を行う。
- ② シュンギクは浅根性の作物で、耕起深度（耕深）が約 20cm にして、整地のハロ耕深が



10cm を目安に行う。

③ シュンギクの種は固い土の塊や石、未熟堆肥などに直接に触れると、発芽が妨害される。また、発芽後の株は根が固い土の塊や石、未熟堆肥などに直接に触れると、その生長が阻害され、生育が悪くなるので、耕起・整地の作業中にこれらの障害物をできる限り取り除く。

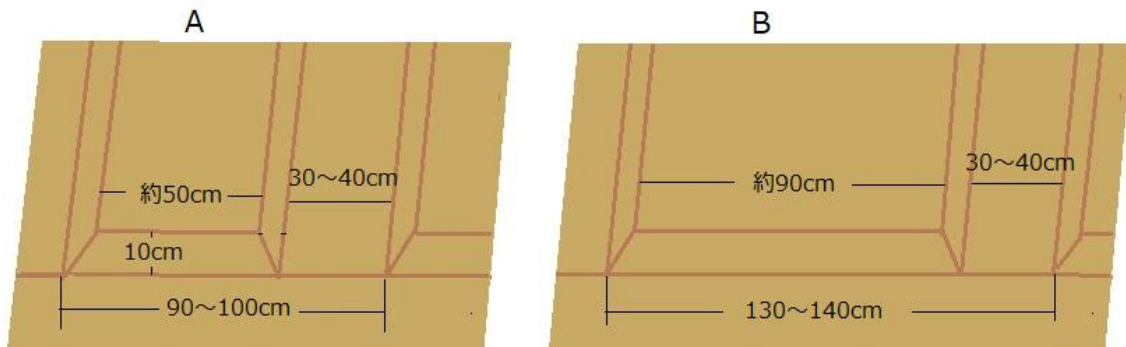


図 3. うね立て模式図 (A : 2 条植え、B : 4 条植え)

## 2. 土壌 pH 調整と基肥施用

シュンギクは生育の適正土壌 pH が 6.0～6.5 で、酸性土壌には生育が抑制されるので、土壌 pH 調整とカルシウム、マグネシウムを補充するために苦土石灰など石灰質肥料を施用する必要がある。石灰質肥料を施用する場合は、土壌 pH が 7.0 を超えないように施用量を適宜に調整する。

1 回収穫の「株張り型」品種は栽培期間が 35～40 日で短いので、必要な施肥量は 10a あたりに窒素、りん酸と加里がそれぞれ 8～12kg である。なお、追肥が不要で、全量基肥にする。

摘み取り収穫の「株立ち型」品種は生育期間が長く、3～4 回の収穫もあり、収量が多いので、必要な施肥量も応分に増え、10a あたりに窒素 15～20kg、りん酸と加里がそれぞれ 10～15kg である。なお、摘み取り回数に合わせて 2～3 回の追肥が必要である。基肥と追肥の配分は基肥 1/2～2/3、追肥 1/3～1/2 にする。ただし、りん酸と加里は全量基肥にして、追肥は窒素だけにしてもよい。

1500～2500kg の堆肥を基肥として施用する場合は、窒素、りん酸、加里の施肥量をそれぞれ 5kg 減らすことができる。前作種類と土質、堆肥の投入有無により圃場ごとに大きく異なるので、作付け前に土壌診断を行い、適正な施肥設計が必要である。

露地栽培ではうね内局部全層施肥を採用するが、ハウス栽培では全面全層施肥を行う。うね内局部全層施肥はうね立て機を使って、うねを作ると同時に肥料をうね内に施用し、作土と混合する方法である。全面全層施肥は、耕起後、基肥を圃場に全面散布して、整地を通じて肥料と作土を混合させてからうね立てを行う方法である。

石灰質肥料は全面全層施肥を行う。圃場を耕起する前に石灰質肥料を全面撒き、堆肥を使

う場合は同時に堆肥も撒き、耕うんを通して作土層に混合させてからうね立てを行う。

土壌 pH 調整と基肥施用には下記の注意事項がある。

- ① 露地栽培では施肥量をやや多めにして、ハウス栽培では施肥量を少なめに抑える。
- ② 肥料中の窒素は圃場に施用された後、降雨により流失される恐れがある。また、施用後の時間が経つと土壌のアンモニア化作用や硝化作用により窒素の損失が大きくなり、りん酸が土壌のりん酸固定により難溶化される。あまりに早く施肥することは肥料の利用効率が下がるので、定植の 5～10 日前にうね立てを行い、それに合わせて基肥を施用する。
- ③ 未熟な堆肥や硬い固形物のある堆肥は種の発芽と根の障害を引き起こすので、その施用を避ける。
- ④ 石灰質肥料を使って土壌 pH を調整する場合は、pH6.5 を目標にするように行う。

### 3. 播種

シュンギクは浅根性の植物で、移植は根を傷つける恐れがないが、移植後の活着に日数がかかり、栽培期間が長くなり、収益性が下がるので、通常は圃場に種を直播きにする。ただし、一部の農家は発芽率の向上と圃場回転率を上げるためにセルトレイを使って、育苗してから圃場に定植する方式を採用している。

シュンギクは種子が発芽しにくい種類に属して、発芽には光が必要である。また、種皮が硬く、水を吸収しにくい特性があり、適温適湿でも発芽率が 50%未満である。従って、播種前に種子を 1 日水に漬けて、発芽抑制物質を溶出させ、十分に吸水してから播くことで発芽が揃い、発芽率も高くなる効果がある。

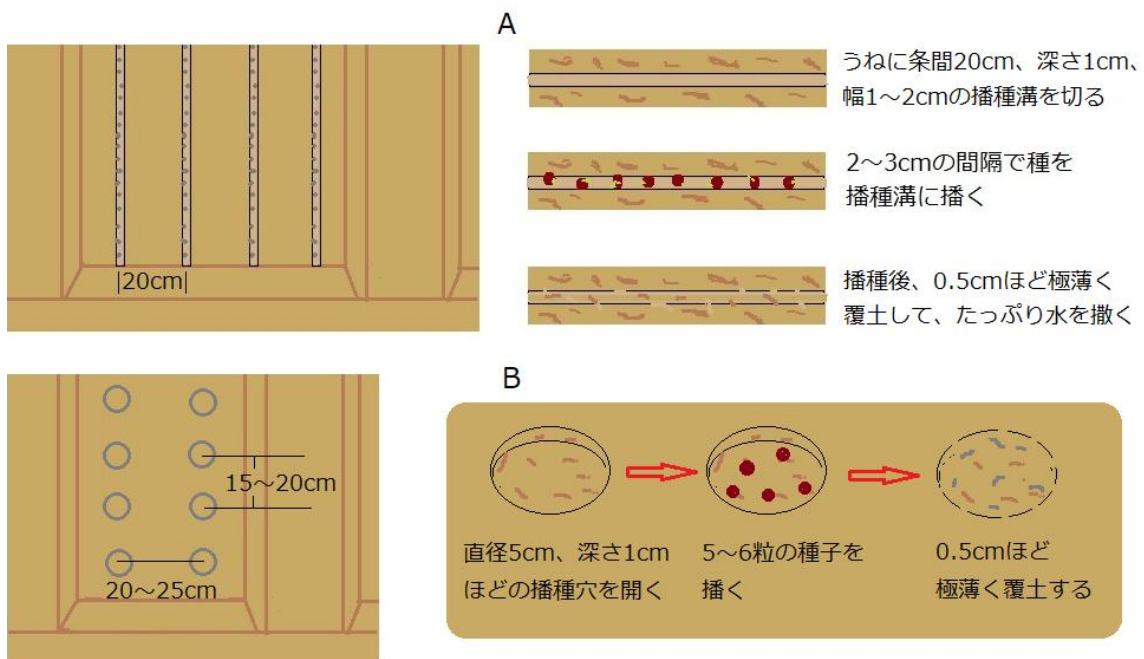


図 4. シュンギクの直播き模式図 (A : 条播き、B : 点播き)

直播きの場合は条播きと点播きがある。通常、「株張り型」品種は条播き、「株立ち型」品種は条播きと点播きを行なう。図4は直播きの模式図である。

条播きは薄い板や先端の尖った金属棒を使ってうね面に条間 20cm、深さ 1cm、幅 1～2cm ほどの播種溝を切り、種を 2～3cm ほどの間隔で播種溝に播いてから 0.5cm ほど薄く覆土する。点播きはうねに直径約 5cm、深さ 1cm ほどの浅い播種穴を開け、その中に 5～6 粒の種を播いてから 0.5～1cm 程度で薄く覆土する。播種穴の条間は 20～25cm、株間は 15～20cm にする。

播種後の覆土は種が見え隠れ程度にして、平クワか手のひらで覆土をしっかり押さえてからたっぷり水を撒く。乾燥防止のために稲わらなどをべた掛けにする方法もある。

種子は地温 15～20℃の環境に大体播種 3～4 日後に芽が地面に出るが、気温の低い季節には発芽の所要日数が長くなる。

育苗定植の場合はセル穴 3～4cm、深 4.5～5cm の 72 穴または 128 穴の育苗トレイを用意して、1つのセルに 3～4 粒の種子を播いて、極めて薄く覆土して乾燥防止のために不織布をべた掛けしてその上に水をたっぷり撒く。

市販の育苗用土は肥料を事前に添加しているので、肥料を入れる必要はないが、普通の畑土で育苗する場合は事前に培土を消毒して、化成肥料を混ぜる必要がある。

1～2 枚の本葉が出た時点で間引きを行い、1セルに 1 本の壮健な苗を残す。4～5 枚の本葉が出た時点で、圃場に定植する。育苗期は大体播種後 20 日までの期間である。図5はセルトレイを用いる播種の模式図である。

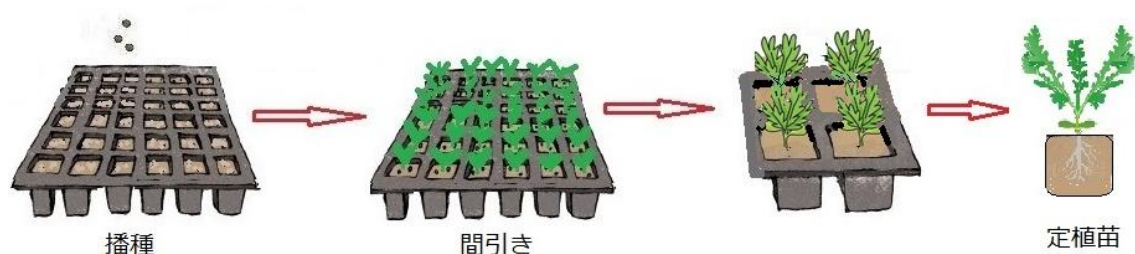


図5. シュンギクのセルトレイ育苗模式図

定植の2～3日前にまず灌水を打ち切り、移植前日には1回たっぷり灌水して、セルに水が十分に浸みるようにすれば、苗がセルから抜きやすくなる。

定植は2条植えまたは4条植えとする。移植ゴテなどでうねに条間 20～25cm、株間 15～20cm にして、直径約 4cm、深さ約 5cm の定植穴をあけ、鉢土を付けている苗を穴に植え付ける。活着を促進するために植付け後、たっぷりと水を撒く。

播種には下記の注意事項がある。

① シュンギクの発芽温度は 10～30℃で幅広いが、最適発芽温度 15～20℃である。10℃未満の低温と 30℃を超える高温では発芽率が極端に低下し、発芽が不ぞろいで、苗も弱くなる。種まき時期を調整して、春播きでは平均気温が 10℃以上、晩霜がなくなった後に行い、

秋播きでは平均気温が 25℃以下に下がった時点で行う。また、ハウス栽培とトンネル栽培では地温が 15～20℃に保つようにする。

② シュンギクは種子発芽には多くの水分を吸収する必要があるので、発芽率を上げるために、催芽した種子を使うほか、播種後、乾燥防止資材をべた掛けして、たっぷり灌水することで発芽に必要な水分を与える。

③ シュンギクの種が発芽に一定の光が必要である。播種溝の深さと覆土の厚さにムラが出ないように注意する。ムラが出ると、出芽が不揃いで、収穫時植株の大きさにもばらつきが出る。

#### 4. 間引き

シュンギクは種子の発芽率が低く、播種密度が高いので、直播きの場合は間引きを行う必要があり、通常 2 回の間引きを行なう。

1 回目の間引きは播種約 10 日後、本葉 1～2 枚展開した頃に行う。条播きでは株間を 4～5cm になるように、点播きでは 1 穴に 2 本残すように弱い苗、小さい苗を手で引き抜く。2 回目の間引きは播種約 20 日後、本葉 4～5 枚展開した際に行なう。条播きでは「株張り型」の株間を約 10cm にして、「株立ち型」の株間を約 15～20cm にする。点播きでは 1 穴に 1 本を残す。図 6 は間引きの模式図である。

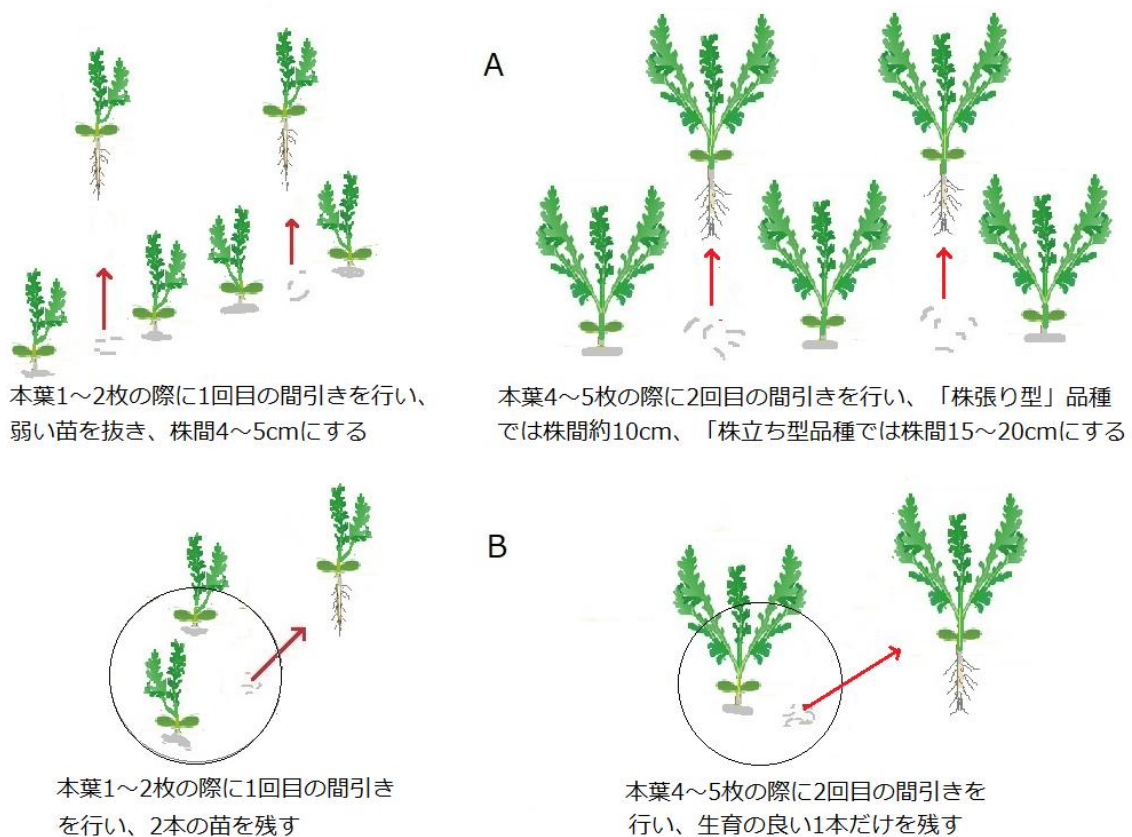


図 6. シュンギクの間引き模式図 (A: 条播きの間引き、B: 点播きの間引き)



ただし、ハウス栽培では、間引き作業が難しいので、播種時に種まきを疎にして、株間 4～5cm にすれば、間引きを不要にすることが可能である。

間引き作業の注意事項は下記の通りである。

- ① 間引きは隣接の株に影響を与えないように 2 回目の間引きは手ではなく、ハサミで切る。
- ② シュンギクは光を好むので、株間を広げると大株になり、品質も向上する。間引きの際に大株を求める場合は株間を広くして、栽培期間を短縮し、早く収穫したい場合は株間を狭くする。特に「株立ち型」品種は 1 回目の収穫以降の生育スペースを確保するために、株間を広くした必要がある。

## 5. 追肥

シュンギクの生育が早く、「株張り型」品種の栽培期間が 35～45 日しかないので、追肥が不要である。

摘み取り収穫の「株立ち型」品種は数回の収穫があり、栽培期間が 80 日以上で、追肥が必要である。毎回收穫してから 2～3 日以内に追肥を行う。毎回窒素 3kg ほどを施用する。収穫後のシュンギク生長を早く回復させるため、硝酸石灰（硝酸カルシウム・アンモニウム複塩）のような硝酸態窒素と水溶性カルシウムを有する肥料または液肥を使うことを勧める。追肥は条間に沿ってすじ状に撒く。

## 6. 中耕・培土

「株張り型」品種は 2 回目間引きの時にクワで条間を軽く耕し、株元に土寄せするだけに留まる。一方、摘み取り収穫の「株立ち型」品種は 2 回目間引き時に中耕を行うほか、毎回追肥後にもクワで条間を軽く耕し、肥料を隠すように株元に薄く土寄せした方がよい。

## 7. 灌水

シュンギクは乾燥に弱い、多湿になると軟弱徒長しやすく、べと病や炭そ病も発生しやすくなるので、露地栽培では原則として灌水をしない。ハウス栽培では灌水量を制御して、栽培の後半は土壌をやや乾き気味に保つことで、軟弱徒長と病害発生を防ぐ効果があり、収穫時に根の付着土を減らすこともできる。

## 8. 病虫害と雑草防除、生理障害の対策

シュンギクは病気と害虫に対する抵抗性が強いが、被害を受けると減収のほか、葉に病斑や喰い穴が出現して、商品にならない恐れもあるので、病虫害の防除が肝要である。シュンギク栽培によく発生する病虫害名と防除法は表 1 にまとめる。

表 1. シュンギク栽培によく発生する病虫害とその防除法

病虫害名	病原菌・害虫	発生時期・被害症状	防除法
------	--------	-----------	-----

べと病	糸状菌	全生育期間を通じて葉に発生。初めに葉に不整形の淡黄色の斑点が発生し、葉裏面に白いカビが見える。進行すると、病斑が拡大して褐色に枯れる。10～20℃涼冷な多湿環境に発生しやすい。多肥、密植は発生を助長する。	密植しない、排水・通風をよくする、薬剤散布。
炭そ病	糸状菌	全生育期間を通じて葉と茎に発生。初めに葉に淡褐色の小斑点が発生し、次第に拡大して、暗褐色の輪郭のはっきりした不規則で大型の病斑になる。病斑部は腐敗し、枯れる。特に下葉に多く見られる。茎に発生した場合は、地際の片側にくぼんだ病斑が見られる。梅雨や秋雨など高温多湿の環境に発生しやすい。多肥、密植は発生を助長する。	密植しない、排水・通風をよくする、薬剤散布。
ヨトウムシ	昆虫	成虫が葉に産卵して、孵化した幼虫が葉を食害する。	薬剤散布、防虫ネット
マメハモグリバエ	昆虫	成虫が葉に産卵して、孵化した幼虫は葉の中に潜み、葉肉を食害する。被害を受けた葉は白い食害跡を残す。夏から初秋に発生が多い。	薬剤散布、防虫ネット
アブラムシ	昆虫	全生育期間に発生。葉から汁液を吸う。吸汁によって生育不良となる。	薬剤散布

病気と害虫は圃場を観察して、発生初期からの防除に努める。ハウス栽培とトンネル栽培は病虫害の発生と伝染拡大を抑制する効果がある。ハウス栽培では栽培後に土壌消毒を行うことで、土壌に残留している病原菌を殺菌して、連作が可能となる。害虫の予防策としては、圃場に防虫ネットを設置して、圃場の周りに発生した雑草を早めに除去して、宿主を減らすことで害虫の被害を軽減する効果がある。

シュンギク圃場によく発生する雑草はほとんど1年生草であり、主な雑草を表2に示す。

表2. シュンギク圃場に発生する主な雑草

雑草名	ナズナ、ハコベ、オオイヌノフグリ、スカシタゴボウ、シロザ、イヌタデ、ヒエ、ハキダメギク など
-----	--

シュンギクは幼苗期から生育が早く、密集しているので、雑草との競争に負けることが少ないが、初期に雑草を徹底的に防除することが重要である。

シュンギクは除草剤に弱いので、物理的手段で除草を行う。通常、栽培前の耕起と整地を通じて、すでに発生した雑草を除去する。その後、栽培期間中に発生した雑草は間引きの際

に手で抜くなどで除去する。摘み取り収穫の「株立ち型」品種は収穫後の追肥で、軽く中耕を行い、雑草を除去する。

## 9. 収穫

「株張り型」品種は播種 35～40 日後、本葉約 8 枚展開して、草丈約 20cm に成長した時点で収穫時期になる。「株立ち型」品種も播種約 40 日後、本葉約 10 枚展開して、草丈約 25cm に成長した時点で収穫時期になる。収穫が遅れると、生育が進み、株が大きくなり、収量が増えるが、茎と葉柄が硬く、繊維が多くなり、アクも強くなるので、食感が大きく落ちる。従って、収穫適期が数日しかないので、遅れないように注意する。

シュンギクの根が地面に露出しないよう、葉が柔らかく、破れやすいため、機械収穫に不向きで、人手により収穫する。収穫方法は品種により異なる。

「株張り型」品種は手で株の下部を掴んで根と一緒に引き抜く。図 7 は「株張り型」品種の収穫模式図である。

「株立ち型」品種は複数回収穫のため、摘み取り収穫を採用する。1 回目の収穫は下の葉 4 枚ほど残して、はさみで主枝を切って収穫する。主枝を摘み取ったことで、わき芽が次々と出て側枝として伸びるようになる。約 20 日後側枝が 20～25cm に伸びたら、葉を 2 枚残してハサミで 2 回目の収穫を行う。このように抽苔までに 3～4 回繰り返して摘み取り収穫が可能である。図 8 は「株立ち型」品種の収穫模式図である。



図 7. 「株張り型」品種の収穫

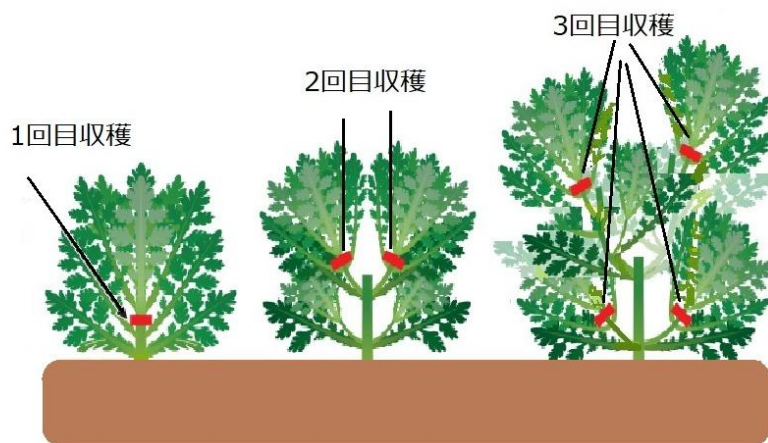


図 8. 「株立ち型」品種の収穫

収穫作業には下記の注意事項がある。

- ① 鮮度維持のために収穫作業は早朝に行い、午前中に終了する。葉は早朝の水分が一番高く、みずみずしく、長持ちするうえ、食感も良い。夕方になると、葉の水分が減少し、アクが強くなる。
- ② 適期に収穫する。収穫時期が遅れると、茎と葉柄が硬くなり、アクも強くなり、食感が落ちる。

## 10. 調整・選別

収穫した「株張り型」品種のシュンギクは根元に付いている土を振り落とし、黄化した外葉を剥き取り、目視で病害虫の被害を受けたものや小さすぎるものを選別・除去してから、水で株に付着している泥などを洗い落して、束にしてポリスチレンフィルムを使って包んでから箱詰めする。収穫した「株立ち型」品種のシュンギクは目視で病害虫の被害を受けたものや小さすぎるものを選別・除去して、束にしてポリスチレンフィルムを使って包んでから箱詰めする。また、鮮度維持のために速やかに 5℃まで冷却してから出荷する。

収穫後のシュンギクは乾燥、黄化しやすく、保管中に繊維も増え、硬くなるので、短期保存でも不適で、調整・選別を経て速やかに出荷する。